

花粉症発生源対策の推進について（推奨事業）

花粉症は、国民の約3割が罹患しており、社会的に大きな問題となっている。特に、スギ・ヒノキ林は、全森林の約3割を、また、人工林の約7割を占めており、日本林業を推進する上で重要な樹林であるが、これが花粉の主な発生源となっていることに注目が集まっている。

スギ・ヒノキは日本の自然的立地に適した樹種として国内に広く分布しており、優良な木質資材の供給源として重要な役割を果たしてきた。今後においても、スギ・ヒノキは、日本の郷土樹種（自生樹種）として自然環境を守り、また、木質住空間やその他の生活用具を供給する樹種として不可欠である。

現在、スギ・ヒノキの人工林は成熟期を迎えつつあり、その生産される木材資源の適正かつ高度な利用を進めつつ、収穫跡地の後継森林を健全に育成していくことが極めて重要となっている。

このような状況の中で、今後のスギ・ヒノキ林の造成に当たっては、花粉発生源対策を推進しつつ、森林と人間の共存を目指して下記事項を十分留意して実施する。

記

今後のスギ・ヒノキ林の収穫後の後継森林の造成に当たっては、スギ・ヒノキ林にはその生育条件が良好な箇所に花粉発生量の少ない育種品種を導入するとともに、尾根筋、沢筋などには広葉樹林を配置し、スギ・ヒノキ林及び広葉樹林が、それぞれの生育条件に応じて適正に混在する森林の造成を基本として、次により、スギ・ヒノキ花粉の過剰な飛散を抑制しつつ、生物多様性や流域保全に十分機能する活力ある森林の造成に努める。

- 1 スギ・ヒノキの造林に当たっては、適地適木の観点から十分検証し、可能な場合には「花粉着生量の少ない育種（苗木）品種」を植栽する。
- 2 スギ・ヒノキ人工林の伐採跡地であっても、適地適木の観点から検証し、広葉樹を導入することを妥当とする箇所にあつては、積極的にこれを導入する。
- 3 前記「1」の措置については、都市近郊林について、特に配慮する。

注意書：「花粉着生量の少ない育種（苗木）品種」の供給については、都道府県森林・林業部局及び同森林・林業研究機関に照会。